

研究活動 I

野田 悟

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表の 年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書)						
(学術論文)						
二十世紀金石書画家—韓登安 (1905-1976) 研究 (中国語)	単	2005・6	中国美術学院 修士論文	当年は丁度、韓登安生誕100周年に当 たり、韓氏は西泠印社に対して、卓越し た貢献をしており、また現代篆刻史上に おける代表的人物の一人である。二十世 紀60年代、西泠印社の復活活動におい 中心的に動き回り、現在の天下第一名社 にまで押し上げた。また彼の書画篆刻に おける造詣は非常に深く、今でも韓氏を 慕う弟子は多く彼らは現在の中国篆刻界 を支えている。韓登安研究の主な研究の 見出しは以下のとおり。 1、緒論 2、韓登安の生平事跡 3、韓 登安の書畫及詩文藝術 4、韓登安的篆 刻藝術 5、年譜 6、結論		202
韓登安的篆刻藝術 (中国語)	単	2005・8	『西泠印社』誌 (浙江省杭州市)	これは修士論文の一部分を修正を加えて 掲載したもので、韓登安は西泠印社100 年を越える歴史の中で唯一の総幹事を務 めた人である。その貢献度と書画篆刻の 実力は社の中では他を寄せ付けない実力 を持ちながらも、病弱な体質と中国国内 の政治の影響により、表舞台に出れない 所が今でも影響している。そこで一人の 外国人からの観点から、特に彼の篆刻芸 術に焦点を置き、4つの変遷期を分析し、 また韓氏が当時使用していた工具につい て考察した内容を論じている。		9
韓登安年譜 (中国語)	単	2005・8	『西泠印社』誌 (浙江省杭州市)	本編は修士論文の第5章の部分をページ数 の関係により、『録』、『文献資料引證』 を削除して記載した。西泠印社史にも記 されていないものも多く執筆している。		8
吾衍與其《學古編》之研究 (中国語)	単	2009・5	中国美術学院 博士論文	篆刻芸術の出現、発展、繁栄はすべてそ れらの時代と切り離すことはできない。 またそれらの時代の政治、経済、文化の 環境は密接な関係があり、他の学術との 結びつきは紀つても切り離すことはでき ない。この『學古編』は現代初めの著名 な学者吾衍によって書かれた中国古代の 印学理論基礎を築いた著作である。しか しながらこれらの方面の文献記載は非常 に少なく、これまでのいくつかの定説を覆 した博士論文となった。見出しは以下の とおり。 1、緒論 2、吾衍與其家世 3、藝術 與交友 4、《學古編》版本考察 5、結語。		221
《學古編》版本考評 (中国語)	単	2011・5	『美苑』魯迅美術學院 學報 (遼寧省瀋陽市)	これは自身の博士論文の第4章の部分を ページ数の関係上、16000余字を7000 余字にまで削り、修正を加え掲載した。 1、近現在研究綜述 2、《學古編》版本 概述 3、《學古編》版本源流考の順にて 執筆している。		8
吾衍『學古編』の版本とその 伝流考 (日本語)	単	2013・3	高野山大学論叢	中国留学時代からの継続で、再度修正を 加え、『學古編』の校勘におけるそれぞ れの版本を考察により比較、分類、整理 し、結論として好古齋本(已佚)から現 代までの主要な版本を系統図として纏 めている。		22
中国における人権論について —アヘン戦争から毛沢東の時代前半 までの「自由」概念を中心に—	単	2014・12				
(その他)						

<p>翻訳 (日本語→中国語) 萩信雄(安田女子大学教授) 『高貞碑拓本筈記』</p>	<p>共</p>	<p>2006・12</p>	<p>『西泠印社』誌 (浙江省杭州市)</p>	<p>萩氏はこれまで「高貞碑」に関するの 9編の執筆を行っておられ、また当時にお いて最旧拓といわれる資料の写真版を入 手され、中国戸籍などの資料と比較し、出 土年月等、これまでの研究の間違いに気 付き、またそれぞれの時代別の拓本の違 について、詳しく自論を述べておられる。</p>	<p>主：野田悟 副：郭超英 (西泠印社 理事)</p>	<p>7</p>
---	----------	----------------	-----------------------------	---	--	----------

研究活動Ⅱ
野田 悟

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又 は発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要	種別・著者 名（共著の 場合のみ記 す）	該当頁数
(その他)						
書道作品		2007・9	中国中央電視台 『同樂五洲』	楷書「北國之春」 最高創作賞受賞(255×82)		
篆刻作品		2007・12	『夢行浙江一留學生作品 展』	「西泠留痕」(計50顆、135×35×4) 一等賞受賞		
書道作品		2008・8	『四海藝同一中国美術 学院作品展』	行草「飲中八仙歌」(138×70×6屏風) 二等賞受賞		
書道作品		2010・6	青葉祭り書道展	金文「老馬知」(『韓非子』説林上69× 35)		
書道作品		2011・2	高野山大学学外書道展	小篆「白樂天答客問杭州詩」(138×70)		
書道作品		2011・2	高野山大学学外書道展	甲骨文「燕子來春社 梨花落清明」(138× 32×2)		
篆刻作品		2011・2	高野山大学学外書道展	篆刻 冊頁『野田悟印存』(計35顆)		23
書道作品		2011・6	青葉祭り書道展	隸書 「四季賛歌」(70×36)		
書道作品		2011・11	靈宝館もみじの会書道展	小篆「四季賛歌」(72×35.5)		
書道作品		2012・2	高野山大学学外書道展	楷書「呂遠之詩」(270×85)		
篆刻作品		2012・2	高野山大学学外書道展	篆刻 「野田悟鳥蟲文印選」(計14顆 (14×7.5×14))		
書道作品		2012・2	高野山大学学外書道展	狂草「四季賛歌」(72×35.5)		
書道作品		2012・6	青葉祭り書道展	金文「論語(擁也)」(130×23)		
書道作品		2012・10	靈宝館もみじの会書道展	調和体「利休の言葉」(25×45)		
書道作品		2012・11	高野山大学学祭書道展	草書「望湖樓醉書(蘇東坡)」(扇子)		
書道作品		2013・2	高野山大学学外書道展	小篆「南無釈迦牟尼仏」(138×35)		
書道作品		2013・2	高野山大学学外書道展	草書「文心雕龍」(42×1015)		
篆刻作品		2013・6	青葉祭り書道展	篆刻「覺然朱跡」(計12顆、73×35)		
書道作品		2013・10	靈宝館もみじの会書道展	調和体「利休七則」(28×40)		
書道作品		2013・11	高野山大学学祭書道展	楷書「丁敬身印論」(扇子)		
書道作品		2014・2	高野山大学学外書道展	金文「菜根譚」(227×27.5×2)		
書道作品		2014・2	南斗会書展	楷書「般若波羅蜜多心經」(138×34.5)		
篆刻作品		〃	〃	篆刻「自東軒主人」他(計12課、 72.5×36)		
書道作品		2014・5	青葉祭り書道展	草書「賢善座」(68×35)		

所属 高野山大学	職名 助教	氏名 野田悟	大学院の授業担当の有無 (無)
教育上の主な業績			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)	年月日	概要	
	自2010・4 至現在	漢字 I ……基本として古典臨書を根底とし、アジア古来からの「尚古思想」を理解し、形臨、背臨を経て、学生同士で切磋琢磨し、作品制作を行う。方法として他大学にはない中国伝統的書道教育方法を用いる。	
	自2010・4 至現在	篆刻 I、II ……他大学にはない中国伝統的篆刻教育を実践し、篆刻の一番の基礎である漢代前後の印章の摸刻を中心に創作に発展させる指導を行う。	
	自2011・4 至現在	中国文化特殊講義 ……中国最古の古文字学の専門書である〔漢〕許慎『説文解字』を使用し、東洋文化の根幹である漢字に興味を持たせ、その背景及びその購読と篆書体の基礎的知識を習得させる。	
	自2010・4 至現在 (隔年)	書道史 (中国) ……アジア文化の根幹は漢字であることを念頭に、BC2000年前の刻符を文字の起源とし、それがどういう経緯を経て、実用及び芸術の域へ昇華していったかを時代的に解明する。	
	自2011・4 至現在 (隔年)	書道史 (日本) ……我が国における書の展開について、時代ごとにいくつかのテーマを取り上げて進める。日本の書は仏教の伝来と密接に関係しており、また周辺の文化的事柄とも絡めることを目標としている。	
	自2014・4 至現在	密教学演習 ……空海が重視した唐代以前の中国書論を理解し、読解を通じて議論し合い、書学における論文執筆の為の研究ノウハウの習得。卒業制作の指導。	
	自2014・4 至現在	キャリアアップ (ペン字) ……将来に必ず必要とするペン字の指導であるが、東洋美学の視点から、個人の好き嫌いの判断ではなく、漢字の成り立ちや中国における時代背景に関連した、指導を行う。	
2. 作成した教科書、 教材、参考書			
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等	2012・12・5	高野山大学図書館戸田文化講座 テーマ「中国美術学院より見る日本書道の現在」 於高野山大学303号書道教室	
	2013・2・3	書道研究南斗会 実践を交えた講演 テーマ「印(章)、印泥及び鈴印の方法について」 於奈良県郡山三の丸会館	

	2013・5・26	書道研究璞社 書法研究会発表 テーマ「現代の中国における書法教育—中国美術学院を通して」 於大阪市西田辺育徳コミュニティーセンター
	2013・7・15	書道研究自琢会練成会講演 テーマ「中国美術学院書法学科入試問題について—実技を中心に」 於高野山清涼院
	2013・11・22	奈良県書写書道教育振興会 実践を交えた講演 テーマ「印泥の豆知識と鈴印について」 於橿原市中央公民館
	2014・6・27	高野山大学ナイトレクチャー テーマ「王羲之はなぜ“書聖”なのか？」 於高野山大学松下講堂黎明館
	2014・8・26	高野山大学ナイトレクチャー テーマ「空海の書法思想について」 於高野山大学松下講堂黎明館
4. その他教育活動上 特記すべき事項	2011・3 (平成23年度)	大阪府池田市一乗院にて「中国留学における中国仏教と古代文字について」の講演。
	自2003・3 至2010・3	浙江省杭州市の杭州朝日外国語専修学校にて副校長として日本語教育を行い、1級合格者200余名を数える。 (現在は顧問に就任)
	自2012・4 至現在	計 10回)及び夏休み高野山大学書道部学生との書道交流。
	自2013・4 至2014・3	橋本高等学校との高大連携学習の一環としての派遣授業。 (週2日、計4コマ)
	2013・10	株式会社フジキン小川会長以来の題字書き。 「宗」、「教」、「科」、「学」
	2014・10	高野山大学図書館編集の題字書き 「高野山大学図書館蔵 善本撰輯」

学会等および社会における主な活動		野田
年 月 日		
自2003・3・2 至2010・3・15	杭州朝日外国語培訓学校（後杭州朝日外国語專修学校に改名）にて日本語教員として教鞭を執る。（当時の役職として副校長に相当する）過去日本語1級合格者は200名以上を数える。（2010年3月まで）	
2007・9・26	中国中央電視台『同樂五洲』に出演、書道作品『北國之春』（楷書）が最高創作賞を受賞。	
2008・6・18	『杭州朝日外国語專修学校』（杭州政府の認可により昇格）の看板を隷書にて揮毫。	
自2010・9・20 至2010・9・23	四国大学日本文学科・書道文化学科大学院生に対する集中講義の同時通訳。講師は江大学金曉明副教授、講義内容は「近現代における中国画と現代書道について」。	
2011・7	「高野山大学いのちのセミナー」・「21世紀医療フォーラム」の広告の題字揮毫。「物の興廃は必ず人に由る。人の昇沈は定んで道にあり。」	
2012・5	大野修作元京都女子大学教授の論文「拓本の真偽と物語の古層性—曹娥碑と越州石氏本を中心に—」（大野元教授が7月中旬に第四屆啓功書法學國際研にて発表）の中国語への翻訳（計9ページ）	
2013・8	高野山大学フジキン小川修平記念冠講座における「宗教 科学」の題字揮毫。	
2013・10	高野山人権研究会において「近現代の中国人権問題について—アヘン戦争から毛沢東時代までを中心に—」を発表。	
大学行政への係わり（所属委員会）		
平成23年度 (2011年)	就職・進路支援委員会委員 密教文化研究所協議会委員（兼任） 教授会選挙管理委員	
平成24年度 (2012年)	就職・進路支援委員会委員 密教文化研究所協議会委員（兼任） 学友会総務本部長 伊都高校高大連携授業派遣講師 高野山大学教友会幹事 教授会選挙管理委員	
平成25年度 (2013年)	就職・進路支援委員会委員 密教文化研究所協議会委員（兼任） 学友会総務本部長 伊都・橋本高大連携授業派遣講師 高野山大学教友会幹事 人権教育推進委員会・人権研究会委員	
平成26年度	就職支援委員会委員長	

(2014年)

密教文化研究所協議会委員（兼任）

学友会総務本部長

伊都・橋本高大連携授業派遣講師

人権教育推進委員会・人権研究会委員

高野山大学教友会幹事

学生部協議会委員

講師派遣テーマ

1、吾丘衍と『学古編』

吾丘衍の著した『学古編』は中国最初の篆刻理論書として篆刻芸術の在り方を示している。その著で尚古主義を唱え、漢銅印への復古を説いている等、篆刻学の原点に返るという意味から、その人物像やその内容等に迫る。

2、書と高野山

空海をはじめ、古来より高野山には数多くの能書家の書跡が残されており、経典類、古文書、墓碑、額等に見ることが出来る。この中で重要と考えられる書跡を取り上げ、書が高野山の中でどのような位置を占めているかに焦点を当てる。

3、西泠印社と韓登安

中国杭州市の西湖畔にある天下第一名社と称される西泠印社の歴史及び、その最大の貢献者と称される韓登安の書や篆刻を中心とした非常に高い芸術性を分析する。

4、許慎『説文解字』の世界

最古の部首別漢字の専門書である『説文解字』を、中国の古代思想をもとにその成立の背景を追い、後世学者による比較研究を行い、表意文字としての意義を考察する。